看護学教育質向上委員会

「看護学教育質向上委員会」

１．構成員

１）委員

委員長：萱間真美（聖路加国際大学）

委　員：宮本千津子（東京医療保健大学)、和住淑子（千葉大学)、宮林郁子（福岡大学)、
高見沢恵美子（関西国際大学)、菅原京子（山形県立保健医療大学)、石橋みゆき（千葉大学)、
五十嵐ゆかり（聖路加国際大学）

２）協力者

なし

２．趣旨

本委員会は、看護系大学における看護学教育の充実・向上を図るために、看護系大学の教育の質に関する事項並びに看護教員に求められる資質・能力向上に関する事項について検討することである。看護系大学が増加していく中で、学部生を対象とするだけでなく CNE や認定看護師の養成などの多様なコースも開講している。このような状況から、学生数や実習形態の煩雑化が臨地実習場所の確保や　臨床指導者との調整を困難にしている。さらに学生の背景の多様化やそれに対応する教員の指導力不足等により、実習の在り方を問われるような現状もあるため実習を通じた看護学教育の質の維持、向上に課題がある。そのため今年度は看護系大学間で課題を共有し、課題解決と教育の向上を目的とした研修会を開催した。

３．活動経過

１）2017 年 5 月 14 日（日）

会員校向けの研修会の目的と運営について会議を行った。午前はシンポジウムとし、午後の演習につながる情報提供をすることに決定した。午後は事例を提示し、午前の情報を基盤として事例について話し合いを持つ形式にすることに決定した。午後に提示する事例は 6 事例（ハラスメントに関する事例 2、実習調整が困難な事例 2、学生指導に苦慮した事例 2）とし、その内容について吟味した。また広報は 2018 年 5 月 15 日から開始し、申込み〆切は、6 月 23 日とした。

２）2017 年 7 月 2 日（日）

(1) 研修会のスケジュール

テーマ：実習指導にあたる教員のための FD 企画ワークショップ
- 多様化する実習に対応するために -

日時：2017 年 7 月 2 日（日）10：00-16：00

場所：聖路加国際大学　CCA

対象者：参加者は実習指導を主に行っている教員・臨床指導者、実習指導においてリーダー的な立場にある人、FD 企画を行う立場にある人で、ワークショップ参加後に各大学で FD などの

研修会などを企画できる人

参加者：午前 131 名、午後 130 名

午前　シンポジウム

目標：臨地実習指導の実践例を共有し、午後の FD 教材開発に生かす

- 実習指導をめぐる困難と FD 企画の考え方　　萱間真美
- 看護教育で養成が求められる人材像　　和住淑子
- 多様化する学生への対応　　高見沢恵美子
- 施設と共同で作り出す看護実習　　宮本千津子

午後　演習

目標：事例検討を通じて FD 企画を学ぶ。

参加者を 5-6 名で 1 グループとし 22 グループに分け演習を行った。事前に困難 6 事例の担当を決め、それについてグループ内でディスカッションしてもらった。話し合った内容は、いくつかのグループにプレゼンテーションしてもらい、全体でディスカッションを行ったのち、委員会で検討した内容をフィードバックした。

演習内容

- 提示した事例をもとにグループ内で話し合う。
- FD のテーマとしてできることは何かを話し合う。その後、それぞれの会員校での FD となるように、提示した事例を再設定する。それらをワークシートにまとめる。
- グループでの話を全体で共有する
- 委員会からフィードバックを行う。

(2) アンケート結果

参加者 131 名にアンケート調査を行った。回答者は 116 名（回答率 89%）であった。

(a) 参加者の背景（表 1 ）

専門領域でみると、成人看護学領域が 33 名と回答者の 28 %を占めており、次いで基礎看護学 27 名、母性看護学 15 名であった。実習担当は学部担当が 114 名（98%）と圧倒的に多かった。職位では、准教授・講師、助教・助手を合わせて 84 名（72%）で、実際に実習にかかわっている人の参加が多かった。参加動機は FD を担当のためと回答した人が 52 名（45%）であったが、次いで実習で学生の対応に苦慮しているためと回答した人が 39 名だった。また実際に FD を担当しているという人は 63 名（54%）であった。

表 1

性別

女性	105
男性	11

専門領域

基礎	27
成人	33
小児	12
母性	15
精神	10
地域	4
老年	9
その他	7

実習の担当

学部	114
大学院	4
CNS	4
その他	0

勤務・所属先

国立大学	9
公立大学	20
私立大学	86
大学病院	0
総合病院	0
その他	1

職位・身分

学長・学部長・学科長・専攻長	2
1以外の教授	29
准教授・講師	54
助教・助手	30
職員	0
臨床指導者	0

参加動機（複数回答可）

実習で学生対応に苦慮しているため	39
実習場所の確保に苦慮しているため	12
実習病院との関係に苦慮しているため	13
FD の企画に苦慮しているため	20
FD 担当のため	52
その他	24

FD の担当

担当している	63
担当していない	51

（欠損値があるため項目によって n が異なる）

(b) 午前の部　（表 2）

午前中のシンポジウムへの評価は、多くが適切だった・とても適切だったという回答であった。しかし、ディスカッションに対しては、適切ではなかった・あまり適切ではなかったと回答した人は 22 名（19%）であった。

表 2

	適切ではなかった	あまり適切ではなかった	適切だった	とても適切だった
実習指導をめぐる困難と FD 企画の考え方	1	1	53	67
看護学教育で養成が求められる人材像	1	2	54	66
多様化する学生への対応	1	15	67	38
施設と共同で作り出す看護学実習	0	2	67	54
ディスカッション	3	18	69	22

（欠損値があるため項目によって n が異なる）

(c) 午後の部　（表 3）

演習に対しては、全員が適切だった・とても適切だったと回答した。しかし、グループディスカッションにおける委員会メンバーのファシリテーションには、あまり適切ではなかったと回答した人が 10 名（9%）だった。演習のまとめとして、委員会からの全体へのフィードバックは、おおむね適切だった・とても適切だったと回答した。

表 3

	適切ではなかった	あまり適切ではなかった	適切だった	とても適切だった
事例から FD のテーマを考える演習	0	0	55	68
ファシリテーターのフィードバック	0	10	60	36
FD の企画の考えかたの説明（委員会からの提示）	0	2	61	60

（欠損値があるため項目によって n が異なる）

(d) ワークショップ全体　（表 4）

開催時期、参加人数、運営スケジュール、テーマに関してはおおむねポジティブな評価であった。また、今後このテーマで FD を企画してみたい、に対してほとんどがそう思う・強くそう思うと回答した。

表 4

	全くそう思わない	そう思わない	そう思う	強くそう思う
開催時期（月）は適切である	0	5	102	16
日曜の開催は適切である	1	26	78	17
各会員校の参加人数は適切である（午前：シンポジウム）	0	9	90	19
各会員校の参加人数は適切である（午後：演習）	0	5	90	26
ワークショップの時間は適切である（午前：話題提供）	0	4	83	33
ワークショップの時間は適切である（午後：演習）	0	0	85	37
開催場所は適切である（午前：話題提供）	0	1	76	45
開催場所は適切である（午後：演習）	0	0	72	50
ワークショップ全体の時間は適切である（1 日研修）	0	3	79	39
ワークショップ全体のテーマは適切である	0	3	78	41
今後、同様のテーマのワークショップに参加したい	0	5	70	46
今後このテーマで FD を企画してみたい	0	3	73	46

（欠損値があるため項目によって n が異なる）

(e) 今後企画してほしいテーマ（自由記述抜粋）（表 5）

対応が困難な学生への対処や実習方法を学びたい、さらにコアカリキュラムについて学びたい、という回答が複数あった。

表 5

学生の特性に合わせた対応とは
ハラスメント、発達障害の学生への対応。
学生の多様化に対応した授業や演習の指導について
FD については続けてほしい
発達障害の学生に対する対応（考え方）
学生に対する実習方法や考え方等について
新人教員の実習指導における指導方法・あり方
新しい実習のあり方に関するワークショップ
看護教育をする実習をするうえで、今後求められるものについて
コアカリキュラムについて（4 名）

（f）ワークショップ全体についての感想　（表 6）

教員同士の交流がもてたこと、演習形式であったこと、FD 研修につなげていきたい、などのポジティブな感想がほとんどであった。

表 6

すぐに生かせる学びにつながった。学内でぜひ共有し、効果的な FD 企画・FD 研修につなげていきたい。
今回のように遠方からでも日帰りで参加できるような研修はよい。
幅広い交流が持てたことにより、個人の思いではなく、看護教育としての捉え方に繋げることができた。
FD 企画の立案について実際演習という形で体験でき、とてもよかった（学びになった）
話題提供の内容がそのまま午後のディスカッションに活きる内容が多く、議論が深まって良かった。
ハラスメント・発達障害のケースについて、もっと深めたかった。
他校の方と意見交換ができてとても楽しく過ごせたし、元気をいただいた気がした。
今回の企画はとても実践に即していて良かった。
ワークショップ形式のものを沢山行ってほしい。
自分一人で困っているのではないことを知ることが出来た。
狭くなりがちな視野がグループワークすることで広がった。やれることからやっていきたい。
社会の変化の中で実習という枠組みをとらえなおすことの必要性の話は刺激的だった。
他大学の教員と同じ題材で意見交換できよかった。特に小グループだったので意見が述べやすかった。
より良い実習環境を考えるよい機会になった。
教員が共通して持つ課題であり、意見交換しやすかった。多くの人の体験や意見から学ぶことができた。
日頃の題材を FD 企画としていく方法がよくわかり有効な時間だった。
他大学の実際工夫していることなど参考になった。考え方の素敵な先生にも出会えた。
グループの進め方など、参考にさせていただきたいと思いました。ありがとうございました。
久しぶりに GW して他者との話し合いはとても楽しかった。

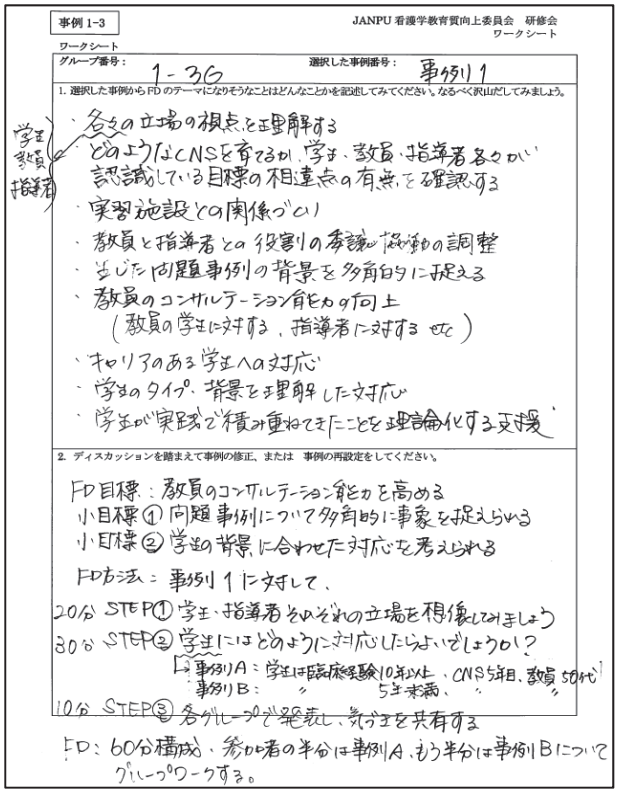
アンケート結果より、今回の研修会は満足度の高い企画であったと言える。今後の研修会においてもグループワークなどの参加型の企画であると、会員校同士のネットワークづくりにも寄与できるため、テーマによっては演習を取り入れる必要がある。今回は参加希望者が多く、17 会員校に参加人数の調整を依頼し、20 名がキャンセル待ちとなった。参加できなかった人や遠方で参加が困難な人等にも研修会の企画や内容を広く共有できる方法を検討していく必要がある。近年の研修会の動向を鑑みて、インターネットを通じた研修会模様の同時配信や研修会後の会員校向け動画配信なども考慮が必要である。研修テーマに関しては、FD 企画を支援するもののほかに、実習指導や学生の対応に関することはニーズが高いと言える。学生の対応を含めた実習に関する課題に関しては、平成 27 年度文部科学省大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業報告書 1）にもあるように、実習に対する課題があると感じている教育機関が 78.5%と圧倒的に多いため、学生の対応だけではなく実習施設との関係や調整などについても研修テーマになりうると示唆された。さらに複数名の回答があった 10 月に公表された看護教育モデル・コア・カリキュラム 2）については、ニーズが高い傾向にあるため今後は看護教育モデル・コア・カリキュラムの活用について調査をした上で、委員会の活動としてどのようにしていくかを検討する必要がある。

(3)セミナーの記録

午後：演習の様子

午後：演習の様子（各グループのディスカッションの様子）

各チームの成果物の例



事例 1-3

JANPU 看護学教育質向上委員会　研修会
ワークシート

ワークシート

グループ番号：1-36　　選択した事例番号：事例1

1. 選択した事例から FD のテーマになりそうなことはどんなことかを記述してみてください。なるべく沢山だしてみましょう。

学生 教員 指導者

・各々の立場の視点を理解する
・どのようなCNSを育てるか、学生、教員、指導者各々が認識している目標の相違点の有無を確認する
・実習施設との関係づくり
・教員と指導者との役割の参議、機能の調整
・生じた問題事例の背景を多角的に捉える
・教員のコンサルテーション能力の向上
（教員の学生に対する、指導者に対するetc）
・キャリアのある学生への対応
・学生のタイプ、背景を理解した対応
・学生が実践で積み重ねてきたことを理論化する支援

2. ディスカッションを踏まえて事例の修正、または　事例の再設定をしてください。

FD目標：教員のコンサルテーション能力を高める
小目標① 問題事例について多角的に事象を捉えられる
小目標② 学生の背景に合わせた対応を考えられる

FD方法：事例1に対して、
20分 STEP① 学生、指導者それぞれの立場を想像してみましょう
30分 STEP② 学生にはどのように対応したらよいでしょうか？
事例A：学生は臨床経験10年以上、CNS5年目、教員50代
事例B：〃　5年未満、〃
10分 STEP③ 各グループで発表し、気づきを共有する

FD：60分構成、参加者の半分は事例A、もう半分は事例Bについてグループワークする。

4．今年度の委員会の目標への評価

2017 年度の本委員会の目標である「実習指導体制を向上させること」に対しては、アンケート結果より、研修会のテーマでもあった「多様化する実習に対応する」ことに関する FD 企画を行ってみたいという回答が 90%以上であったことから、目標達成につながったと言える。今後はフォローアップ調査として研修会に参加した会員校に FD 企画についての調査をしていく必要がある。

5．今後の課題

FD 企画のフォローアップ調査とともに看護学教育モデル・コア・カリキュラムの活用と各大学におけるカリキュラムの発展を促すことを目標に会員校のニーズ調査を行う。

6．資料

1）一般社団法人 日本看護系大学協議会（2016）平成 27 年度文部科学省大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業報告書
http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2015/12/H27MEXTProject.pdf

2）文部科学省（2016）看護教育モデル・コア・カリキュラム
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf